

チャのミカントゲコナジラミ発生調査結果（11月）

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めてチャへの寄生が確認され、分布が拡大しています。

10月下旬～11月上旬に府内茶園におけるミカントゲコナジラミの発生状況を調査した結果は下表のとおりです。

1 調査結果の概要

平成21年度ミカントゲコナジラミ調査結果(平成21年10～11月)

	調査ほ場数	発生確認ほ場数※1	発生ほ場率			平均寄生程度 ※2		
			21年	20年	19年	21年	20年	増減 ※3
南山城村	8	8	100	100	100	39 (少)	59 (中)	減少
木津川市	6	6	100	100	100	42 (中)	56 (中)	減少
和束町	7	7	100	100	100	41 (中)	58 (中)	減少
井手町	1	1	100	100	100	65 (多)	65 (多)	横ばい
宇治田原町	6	6	100	100	100	40.3 (中)	52 (中)	減少
京田辺市	2	2	100	100	100	58 (中)	73 (多)	減少
八幡市	1	1	100	100	100	33 (少)	40 (少)	やや減少
城陽市	2	1	50	50	100	5 (少)	2 (少)	横ばい
宇治市	6	4	67	67	83	7 (少)	16 (少)	やや減少
京丹波町	4	4	100	100	100	55 (中)	28 (少)	増加
南丹市	2	2	100	100	0	26 (少)	18 (少)	やや増加
綾部市	11	6	55	9	0	7 (少)	3 (少)	横ばい
福知山市	12	3	25	17	0	11 (少)	4 (少)	やや増加
舞鶴市	6	1	17	0	0	0.3 (少)	0 (無)	横ばい
京丹後市	10	7	70	30	33	23 (少)	7 (少)	増加

調査方法：1ほ場あたり20か所について、すそ部への寄生程度を目視により指数化。

<指数0：寄生なし 指数1：寄生枚数概ね半数以下 指数2：寄生枚数概ね半数以上

指数3：寄生枚数半数以上、かつ寄生虫数著しく多い>

調査ほ場毎に平均寄生程度を次式により算出、発生程度の指標とする。

$$\text{平均寄生程度} = \frac{0 \times N_0 + 1 \times N_1 + 2 \times N_2 + 3 \times N_3}{(N_0 + N_1 + N_2 + N_3) \times 3} \times 100$$

(Nxは、指数をxとした調査か所数)

※1 20か所調査において発生を認めたほ場数。

※2 平均寄生程度は、19年は調査していない。また数値横の()内は、右表をもとに5段階表示した。(調査茶園を市町村毎に集計)

※3 増減は、21年と20年の平均寄生程度の差が、10以上の場合は「増加」、「減少」とし、5以上10未満の場合は「やや増加」、「やや減少」、5未満は「横ばい」とした。

無：平均寄生程度	0
少：	～40
中：	～60
多：	～80
甚：	～100

- (1) 今年度は舞鶴市でも初めて寄生を認め、調査した全ての市町村で、発生が確認されました。調査結果の概要としては、府内全域に発生地域が拡大しています。平均寄生程度をみると山城地域では減少傾向に、丹波・丹後地域では増加傾向になっています。
- (2) 確認ほ場率は、山城地域では調査した全ての市町村で昨年と同じほ場率となっています。丹波・丹後地域では、綾部市以北で急激に高まっています。
- (3) 発生程度は、20年と比較すると山城地域では大部分の市町村で減少していますが、井手町が横ばい、城陽市がわずかに増加しています。丹波・丹後地域では全ての市町で増加しています。

2 防除について

冬期（1～2月）のマシン油乳剤（トモノールS、ラビサンスプレー）の2回散布は、3齢、4齢幼虫にも効果があり、高い防除効果が得られますが、以下のような点に注意してください。

- (1) 赤焼病が助長されることがあるので、赤焼病の常発茶園や幼木園では使用を避けてください。
- (2) 古葉に薬害（油浸）を生じることがあります。
- (3) 銅剤との近接散布で薬害の恐れがあります。

3 登録薬剤

名称	希釈倍数	使用時期	使用回数
ハチハチ乳剤	1,000倍	摘採14日前まで	1回
アプロード水和剤	1,000倍	摘採14日前まで	2回以内
アプロードエースフロアブル	1,000倍	摘採14日前まで	1回
ダニゲッターフロアブル	2,000倍	摘採7日前まで	1回
ランネート45DF	1,000倍	摘採21日前まで	2回以内
トモノールS	50倍	10月～3月	—
ラビサンスプレー	75倍	10月～3月	—